高句麗都城研究と平壌安鶴宮遺跡

千田剛道

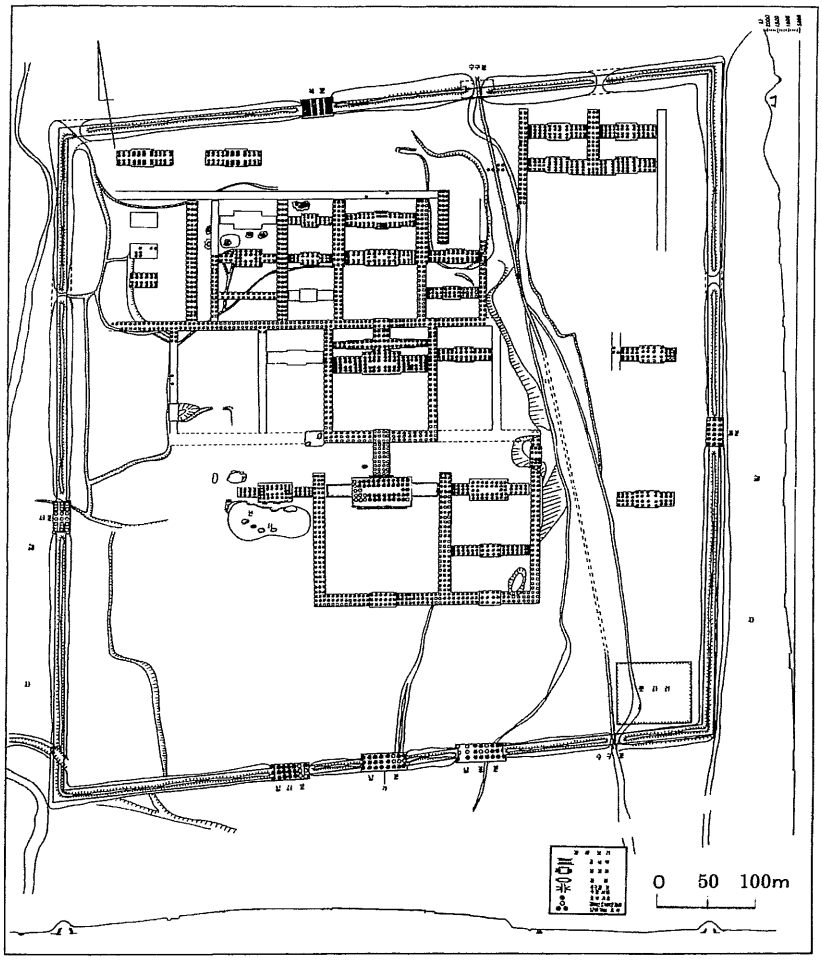
はじめに

平壌は、高句麗時代後期（四二七～六六八年）の都城の所在地である。

安鶴宮遺跡は平壌市街地の東北郊外、高句麗時代の王都を守る山城である大城山城の南麓に位置し、一辺約六〇〇メートルのほぼ方形の土塁をめぐらした遺跡である（第1図）。

安鶴宮遺跡の年代的な位置づけには大別して高句麗時代の都城関係遺跡とする見方と、高麗時代の遺跡とする説とがある。筆者は現在、高麗時代説をとっている。

安鶴宮遺跡の年代観には最大、数百年もの開きがあるのは奇異である。このような見解の差は、遺跡と遺物の理解に大



第1図　安鶴宮遺跡平面図

きな相違があることに起因する。

そこで、本稿では、近年の動向を加えて、安鶴宮遺跡に関する調査、研究史を整理するとともに、特に出土瓦の検討により、高句麗都城の研究における本遺跡のあるべき位置を明確にしたい。

一　安鶴宮遺跡の調査研究史

（一）　発掘以前 ― 地誌の記述と踏査による知見 ―

安鶴宮は、古くからその存在が知られており、朝鮮時代の地誌『東国輿地勝覧』（一四八一年撰）の平壌府の項に次のように見える。

長安城

在大城山東北。土築。周五千一百六十一尺。高十九尺。

高句麗平原王二十八年。自平壌移居于此。城中有安鶴宮古址。

文献史料によると、高句麗後期における都城は、平壌城と呼ばれ、五八六年（平原王二八年）の遷都後は、長安城とも呼ばれていることがわかる。そこで、研究上では、混乱をさけるため五八六年の遷都を境に、その前を前期平壌城、後を後期平壌城と呼びわけており、ここでもそれにしたがう[注1]。そうすると、この記事は、安鶴宮遺跡を後期平壌城とみなしていることになる。

安鶴宮遺跡が注目されてきたのは、高句麗の王都に関する文献史料の「城の中にはただ食糧や武器を蓄え敵の侵攻に備え、敵が遣ってきてはじめてそこに入って守る。王はそれとは別に近くに宅をつくり、いつも城にいるわけではない」という記事[注2]からイメージされる高句麗王都における山城と王宮の関係に、この遺跡がふさわしいと理解されてきたからにほかならない。つまり、高句麗中期（三世紀～四二七年）の都城のおかれた現在の中国吉林省集安市に所在する平地城（遺跡名は古くは通溝城、近年の現地では国内城と呼ぶ）と山城（古くは山城子山城、近年の現地では丸都山城と呼ぶ）の関係にみられる平地の王宮、山城のありかたを継承する、とみられてきたからである

安鶴宮遺跡が地図に載せられたのは、一九一五年の『朝鮮古蹟圖譜　一』[注3]の付図「平壌附近楽浪郡及高勾麗遺蹟圖」（五万分の一）と題する地形図に、「伝安鶴宮址」として表示されたのが、早い例であろう。また、同時に刊行された『朝鮮古蹟圖譜　二』[注4]、には、安鶴宮の遺跡写真と瓦（軒

丸瓦3型式、軒平瓦4型式）が掲げられ、同図譜の解説にこの遺跡に関する記述がある。先にあげた朝鮮時代の地誌を除けば、安鶴宮遺跡にかんする記述として早いものであろう。全文を引用する。

傳安鶴宮址［三八四―四〇二］

平壌の東北約三里、大同郡林原面大城山下なる安鶴宮と稱せらるゝ處にあり（地圖一參照）方約五六町繞らすに土城を以てす。傳へて高勾麗の安鶴宮の遺址と稱し、又長安城の故地とも云ふ。土城内より高勾麗時代の者と認むべき巴瓦及び唐草瓦を多く發見せり。其地形より判ずるに、或は長壽王の遷り都せし平壌城の址跡にはあらざるか。猶後考を俟つ。

『朝鮮古蹟圖譜　解説　二』(注5)

その後、一九二八年、朝鮮の建築、遺跡などの体系的調査研究の先駆者である関野貞は、論文「高句麗平壌城及び長安城に就いて」で、文献史料、遺跡、遺物を詳細に検討して平壌地域における高句麗都城の全体像を示した(注6)。

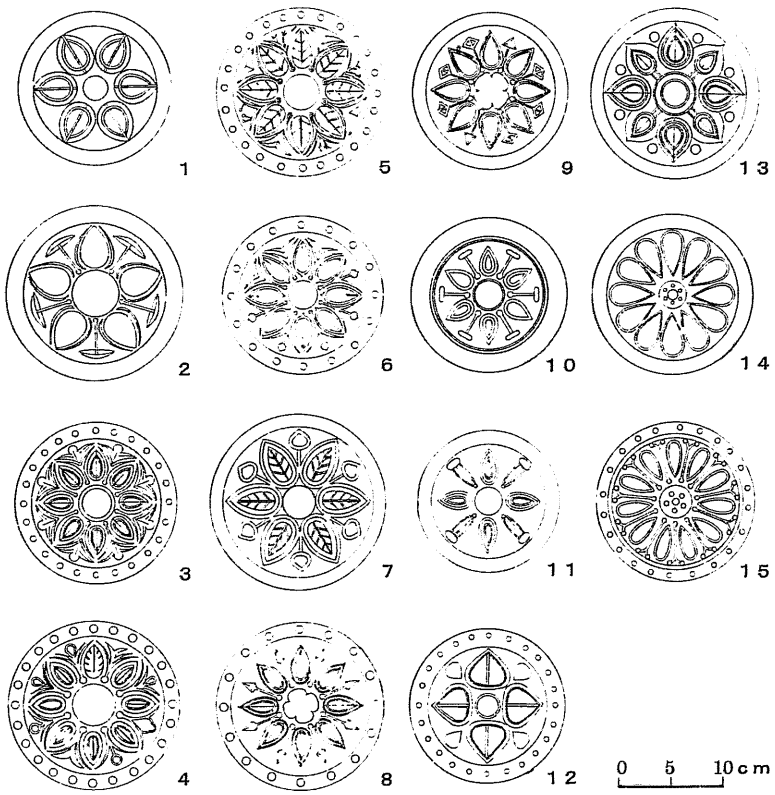
関野は、翌一九二九年、『高句麗時代之遺蹟』(注7)を編集し安鶴宮遺跡の細部写真と地図、瓦を紹介した。瓦は、軒丸瓦11型式、軒平瓦8型式に増えている。同書の付図のうち、「大城山城址及安鶴宮址及古墳分布図圖」および、「平安南道大同郡林原面四足里安鶴宮址」の2葉が安鶴宮とその周辺を詳細に図示する。本書の解説は、その存在が確認できず、未刊に終わったようであり、また関野は一九三五年に亡くなったので、上記の一九二八年の論文が関野の最新かつ最終的なものとなった。遺跡と遺物の関連で関野の見解の進展をたどると、はじめ安鶴宮の内部に高句麗瓦が散布していることにより、高句麗時代の王宮、すなわち、前期平壌城とみなしたのであった。　けれども後に修正された高句麗瓦の年代観にもとづき、遺跡は高句麗末期の別宮という見解に変る。それに伴い、前期平壌城の王宮を別個にさがすことになり、その結果、確認されたのが清岩里土城である。関野はこの土城内の東より部分を王宮に、西より部分には離宮の存在を推定した。いずれも瓦が多量に散布している箇所である。

高句麗都城に関して関野の没後の顕著な動きとしてあげるべきは、一九三八年の清岩里土城の発掘であろう。関野が王宮の所在地に推定した土城内東よりの台地を発掘し、検出した遺構は、王宮ではなく、寺院跡とみなした。これが清岩里廃寺である(注8)。

（二）一九四五年以後―発掘調査の成果―

安鶴宮遺跡に発掘調査の鍬が入ったのは朝鮮総督府による植民地支配から解放された一九四五年以後のことである。最初の発掘は朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略称）により一九五八年から一九六一年にかけて行われ、一九六四年に報告された（『大城山一帯の高句麗遺跡に関する研究』）(注9)。この時点で、始めて土城内で建築遺構が姿を現し、また瓦も多量に出土した（軒丸瓦10型式、軒平瓦3型式）。その後、一九七〇年代にも大規模な調査が実施され、一九七三年に報告された（『大城山の高句麗遺跡』）(注10)。この調査では、さらに多数の建築遺構が検出された。

これらの調査により、土城内には、回廊でかこまれた広場をもつ宮殿風の区画を複数配置する大規模な建築遺構の存在が確認された。また建築遺構に伴う瓦も大量に出土し、型式数はさらに増え、軒丸瓦15型式、軒平瓦10型式となる（第2，3図）。この二つの調査によって、採集資料のみに拠らざるを得なかったそれまでの研究に対して、はじめて遺構と瓦とが関連をもつ資料として

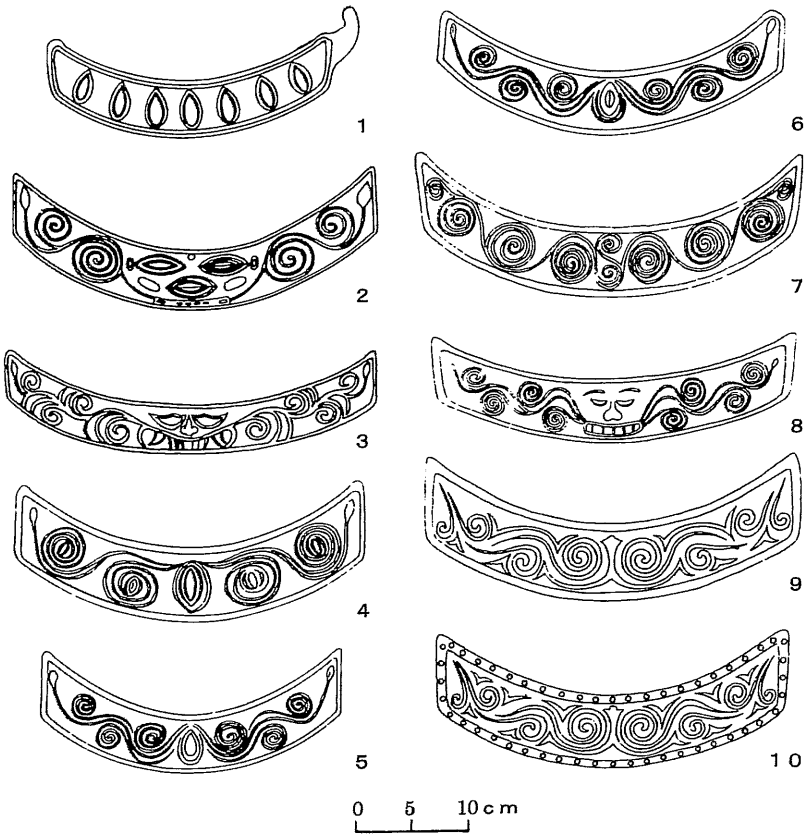


第2図　安鶴宮遺跡出土軒丸瓦

議論が可能になったことの意義は大きい。北朝鮮は、これらの調査報告書において安鶴宮遺跡を前期平壌城の王宮と位置づけ、当然ながら瓦の年代観についても前期平壌城の時期とみている。

安鶴宮遺跡を前期平壌城の王宮とみる見解は、北朝鮮においては、定説とされ、今日にいたる(注11)。また、日本では、安鶴宮遺跡の発掘成果は、貴重な高句麗時代遺跡の調査として紹介され、以後、この遺跡は前期平壌城に属する遺跡としてとりあげられることが多かった。その後、高句麗末期説によって記述するものもあらわれ、近年では高麗時代説への言及も見られるようになってきている(注12)。一方、中華人民共和国（以下、中国と略称）や大韓民国（以下、韓国と略称）では、北朝鮮の前期平壌城王宮説をそのまま述べる記述が多い(注13)。なお、最近の北朝鮮と韓国の共同調査の報告書でも、前期平壌城王宮説にしたがっている(注14)。

安鶴宮遺跡の年代論は、以上のように諸説が並び立っている状況である。安鶴宮遺跡の考古学側からの年代論への接近は、発掘調査で大規模な遺



第３図　安鶴宮遺跡出土軒平瓦

構群にともなって出土した資料、とくに瓦類の検討によるのが基本であると考える。以下では、これまで筆者が検討してきた安鶴宮遺跡の瓦の年代的検討にもとづき概述する。

二　安鶴宮遺跡出土瓦の年代の検討

筆者は、安鶴宮遺跡の瓦を検討する中で、報告書の示す年代観に疑問をもち、はじめは高句麗末期と理解した(注15)。その後、高句麗時代ではなく、高麗時代にくだる。という見解に変わっている(注16)。この間に、集安地域を中心に平壌地域をふくめた高句麗時代の瓦編年案についても公表した(注17)。こうして現在の筆者は、瓦の年代、そして遺跡の年代を高麗時代とみる考えに立っている。

安鶴宮の瓦を考えるうえでの重要な基準のひとつは、高麗（九三五～一三九二年）の都であった開城の満月台遺跡である。高麗の首都は、江華島に移った時期（一二三二～一二七〇年）をはさんで、開城にあり、王宮の所在地が満月台遺跡である。満月台遺跡の瓦については、一九一八年刊行の『朝鮮古蹟図譜　六』(注18)に掲載されている資料を検討した。

満月台遺跡の瓦は、採集資料であるので、『高麗史』などの文献史料にみえる多数の宮殿名との対比などは行ない得ない。満月台遺跡に関しては、近年、北朝鮮による発掘があり、また北朝鮮と韓国による共同の試掘調査も実施されつつあるので、今後、より良好な資料の出現が期待される。しかし、そうした調査の結果は、まだまとまった形では報告されていないので、ここでは、この資料によって検討する。

満月台遺跡の瓦について軒丸瓦、軒平瓦を総体としてみると、大きく、2種類に分けることができる。これを仮にA類、B類とする。

先に、B類について述べる。軒丸瓦B類は、蛇の目文などと呼ばれる文様で、中央に、半球形の中房をおき、その周囲に同心円状の隆起線をめぐらす。軒平瓦B類については、軒丸瓦と同様の半球形の文様を2個配列する。次にA類の軒丸瓦は、B類とした以外の、蓮華文などを一括する。軒平瓦A類は、B類以外の唐草文などを一括する。B類は、軒丸瓦6点に対して、軒平瓦は、7点が図示されている。軒丸瓦、軒平瓦は、ほぼ同数であるので、複数のセットとして屋根に葺かれたものと理解して大過ないであろう。一方、A類は、軒丸瓦23点、軒平瓦14点が図示されており、これも不完全ながら全体としては、本来いくつかのセット関係にあったものであろう。

さて、このような瓦の年代をどうみるか。まず、A類は、

高麗時代にさきだつ統一新羅時代の文様を継承したものと理解でき、総体として、B類に先立つものと理解できる。つぎの問題はB類の出現年代であり、これを厳密に決めることが、安鶴宮の瓦の年代を考える上でも最重要の課題である。ここでは、朴銀卿の研究(注19)を参考にしてB類は高麗中期、およそ十二世紀から十三世紀にかけて出現したのではないかと推定しておく。

ここで、安鶴宮の瓦にもどると、安鶴宮跡からは、軒丸瓦15型式、軒平瓦10型式が出土しており、軒丸瓦、軒平瓦はセット関係をなしていたことが推定できる。満月台遺跡との比較では、B類がまったく出ていないことがまず注目される。

安鶴宮の瓦が満月台遺跡B類よりさがることはないと考えるけれども、A類との関係はどうか。筆者は、安鶴宮の軒丸瓦は、大きくは、A類に対比できる資料とみている。満月台の瓦に類似の文様がみあたらないのは、安鶴宮の瓦が平壌地域の特色を濃厚に有しているためと理解している。平壌地域では、安鶴宮遺跡以外では、満月台遺跡のB類にあたる瓦が分布していることも、安鶴宮の瓦がB類に先立つものであることをうがわせる。すなわち、B類が朝鮮半島にひろく分布する、いわば広域様式とでもいうべき文様をもつ瓦であるのに対して、安鶴宮の瓦は、ほぼ平壌地域に分布する強い地域色をもった瓦であることを示唆している。なお、平壌の西北約24キロに位置する元五里廃寺（旧平安南道平原郡）でも高句麗時代の遺跡に重複して高麗時代の遺構、遺物が検出されている(注20)。この遺跡で高麗時代瓦として紹介されている瓦にも安鶴宮遺跡と類似した文様の軒丸瓦、軒平瓦が報告されているから、安鶴宮遺跡のタイプの瓦は厳密には平壌地域に限定されず、もうすこし広がる可能性を指摘しておく。

以上のようにして、安鶴宮遺跡の瓦の年代は、B類の出現以前、すなわち、十一～十二世紀ごろとみることができる。

発掘調査で大規模な建築遺跡に伴って、瓦が出土したことが報告されているわけであるから瓦の年代から遺跡の年代を考えることは妥当な手続きである。以上に述べた考古学的な検討によって、安鶴宮遺跡は、前期平壌城（四二七～五八六）の時期ではなく、また高句麗末期とする説も成り立たず、結論的には高麗時代の遺跡とみなさざるを得ないことになる。

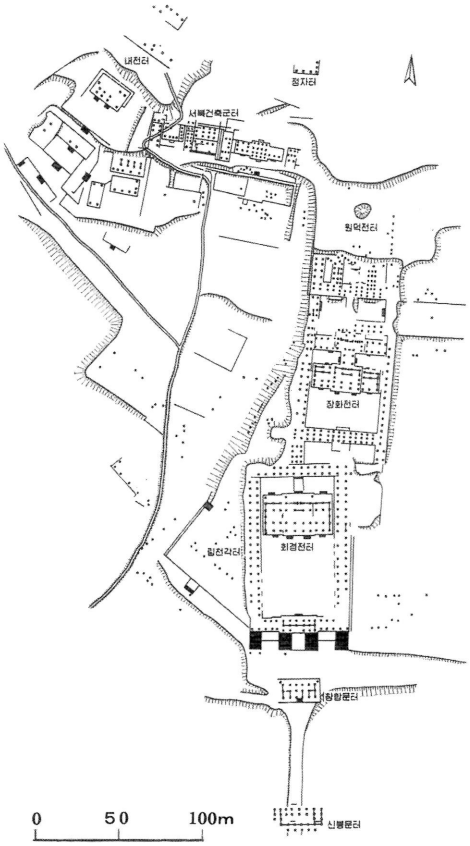
三　新たな採集資料の紹介と安鶴宮遺跡の年代論

以上のような年代的検討とは別に、一九七三年の発掘調査報告以降に、安鶴宮遺跡に関係する瓦の採集資料がいくつ

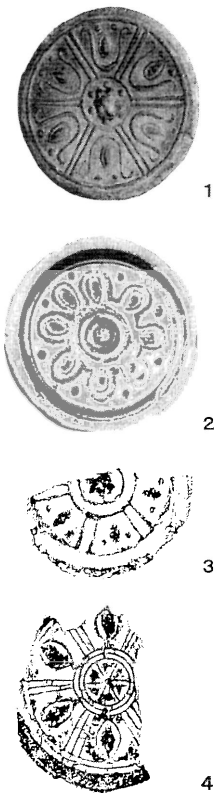
か、紹介されており、遺跡の年代論にもかかわるとの理解もあるので、ここで言及しておきたい。

まず、一九八九年刊行の『朝鮮遺跡遺物図鑑　3　高句麗編（1）』(注21)に掲載されている安鶴宮遺跡の瓦に、上記2冊の発掘報告書にはみえない型式の軒丸瓦2点が掲載されている（第5図1・2）。また、二〇〇五年、谷豊信は「平壌遷都前後の高句麗瓦に関する覚書―東京国立博物館収蔵資料の紹介―」(注22)において、安鶴宮出土という瓦を紹介した。その中には、やはり上記報告書にみえない型式2点が含まれており（第5図3・4）、「安鶴宮を巡る論争に一石を投ずるもの」と述べている。

これらの資料は、いずれも、従来から高句麗時代の瓦とされてきたものであって筆者もその点に関しては異論がない(注23)。問題は、発掘遺構との関連である。もし、遺構と関連のある瓦であるならば、安鶴宮遺跡の年代が高句麗時代にさかのぼる可能性をもつことに



第4図　満月台遺跡平面図



第5図　安鶴宮遺跡採集瓦

なるからである。後者は、発掘品ではなく、採集資料であることが明確である。これに対して前者については、解説がなく、不明とせざるを得ない。ただ、一九七三年の発掘報告刊行以降、一九九一年までの間、安鶴宮遺跡について発掘調査がおこなわれたという情報はなく、現段階では、採集資料と推測しておく。

そもそも安鶴宮遺跡では、一九七三年刊行の報告書で、安鶴宮遺跡内に石室基底部を残す高句麗古墳の存在が報告されている（安鶴宮1～3号墳）。高句麗時代の遺跡を破壊して安鶴宮遺跡が造営されていることは明白である。安鶴宮遺跡内から高句麗時代の遺物が採集されることは異とするに及ばない。したがって、このような遺構との関連が不明な資料によって遺跡の年代論にまで及ぶのは困難であろう。

おわりに―高句麗都城研究と安鶴宮遺跡の位置―

以上のように、安鶴宮遺跡は高句麗時代ではなく、高麗時代とみなさざるを得ない。高麗時代の遺跡ということなると、遺跡の性格が問題になる。筆者はかつて、『高麗史』太祖五年（九二二年）条にみえる「在城」ではないか、と推定したことがある(注24)。これに関する近年の文献史学の成果をみよう。二〇〇四年、田中俊明は、安鶴宮遺跡出土瓦の高麗時代説を前提にした上で、安鶴宮遺跡を『高麗史』文宗三五年（一〇八一年）条にみえる左右宮のうちの「左宮」にあたるという説を提出し、安鶴宮遺跡の歴史的性格に関する研究を大きく進めた(注25)。考古学側としては、瓦に関していえば、詳細な年代を絞り込む作業が残されることになった。いま、遺構について、詳細に比較検討する用意はないけれども、高麗時代の遺跡として安鶴宮遺跡と比較すべきは、先に瓦の検討でも扱った開城の満月台遺跡であり、その遺構平面図を掲げておく（第4図）(注26)。一瞥しただけでも、平地に展開した安鶴宮遺跡に対して、狭い尾根の連続する丘陵地に配置された満月台遺跡とは立地の違いを越えて、回廊で区画された多数の建築群を配置する点など両者に多くの共通点をみいだすのはさほど困難ではない。建築遺構についても今後、広範な比較検討が期待される。

安鶴宮遺跡は、以上のように、発掘報告刊行の当初段階からみると、年代観が大きく変わらざるをえない。とりわけ安鶴宮遺跡が高句麗都城研究の対象からは外れることになった点は重要である。遺跡・遺物を中心にした高句麗都城の研究は確実な資料にもとづく新たな出発が求められているといえよう。

（追記）本稿は、都城制研究会（二〇一〇年九月一八日、大阪歴史博物館）における発表「高句麗都城研究の一動向―平壌安鶴宮遺跡をめぐって―」をもとにしたものである。研究会において貴重なご教示を頂いた中尾芳治氏をはじめとする諸氏、成稿にあたって有益な助言を与えられた鈴木拓也氏に感謝する。

【注】

（注1）田中俊明「後期の王都」『高句麗の歴史と遺跡』（東潮・田中俊明編著）中央公論社、一九九五年

（注2）『周書』巻四十九　高麗伝の記事。現代語訳は田中俊明「後期の王都」（注1前掲）による。

（注3）朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜　一』一九一五年

（注4）朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜　二』一九一五年

（注5）朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜　解説　二』一九一五年

（注6）関野貞「高句麗平壌城及び長安城に就いて」『史学雑誌』第39編第1号、一九二八年

（注7）朝鮮総督府『高句麗時代之遺蹟　図版上冊』（古蹟調査特別報告第7冊）、一九二九年

（注8）小泉顕夫「平壌清岩里廃寺址の調査（概報）」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会、一九四〇年

（注9）蔡熙国『大城山一帯の高句麗遺跡に関する研究』（遺跡発掘報告第9集）社会科学院出版社、一九六四年

（注10）金日成総合大学考古学・民俗学講座『大城山の高句麗遺跡』金日成総合大学出版社、一九七三年

（注11）考古学関係では、社会科学院考古学研究所『高句麗文化』社会科学出版社、一九七五年、同『朝鮮考古学概要』科学百科事典出版社、一九七七年、パク・ジンウク『朝鮮考古学全書　中世編　高句麗』一九九一年、社会科学院考古学研究所『朝鮮考古学全書』のうち『中世編4　高句麗の城郭』、『中世編5　高句麗の建築』、『中世編11　高句麗遺物』、いずれも、㈱ジン・インイン、二〇〇九年、などがある。通史では、社会科学院歴史研究所『朝鮮通史（上）』科学、百科事典出版社、一九七七年、『朝鮮全史　第3巻　高句麗』、一九七九年などがあげられる。

（注12）永島暉臣慎「高句麗の都城と建築」『難波宮址の研究』（第七、論考編）一九八一年、が最初の詳細な紹介である。その後、町田章「中国都城との比較」『季刊考古学』第22号（特集　古代の都城―飛鳥から平安京まで）、一九八八年など都城関係の記述でも前期平壌城説によるものが多い。田中俊明「後期の王都」（注2前掲）や、早乙女雅博「ピョンヤンの遺

跡と遺物」『朝鮮半島の考古学』同成社、二〇〇〇年、は高句麗末期離宮説によって記述する。中尾芳治・佐藤興治・小笠原好彦編『古代日本と朝鮮の都城』二〇〇六年、は後で触れる田中俊明による高麗時代の「左宮」説も含め諸説を紹介する。

（注13）近年の概説書や概説的記述をあげると、中国では魏存成『高句麗遺跡』文物出版社、二〇〇二年など、韓国では姜賢淑「高句麗」『韓国考古学講義』韓国考古学会、二〇〇七年などが代表的なものであろう。

（注14）東北亜歴史財団『高句麗安鶴宮調査報告二〇〇六年』（南北共同学術調査報告書2）二〇〇六年

（注15）千田剛道「清岩里廃寺と安鶴宮」『文化財論叢』同朋社、一九八三年　千田剛道「平壌安鶴宮遺跡の基礎的検討」『日本原史』吉川弘文館、一九八五年

（注16）千田剛道「高句麗・高麗の瓦―平壌地域を中心として―」『朝鮮の古瓦を考える』帝塚山考古学研究所、一九九六年、千田剛道「高麗の瓦―平壌と開城の比較を中心に―」『高麗古都開城の文化的価値と保存』イコモス韓国委員会、二〇〇五年、参照。

（注17）千田剛道「瓦からみた高句麗古都集安」（服部敬史・千田剛道・寺内威太郎・林直樹「工高句麗都城と山城―中国東北地方における都城と山城の基礎的研究―」の第2章）『青丘学術論集』第5集、一九九四年

（注18）朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜　六』一九一八年

（注19）朴銀卿「高麗瓦当文様の編年研究」『考古歴史学志』第4輯、一九八八年

（注20）小泉顕夫「泥佛出土地元五里廃寺址の調査」『昭和十二年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会、一九四〇年

（注21）朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会『朝鮮遺跡遺物図鑑3　高句麗編（1）』一九八九年

（注22）谷豊信「平壌遷都前後の高句麗瓦に関する覚書―東京国立博物館収蔵資料の紹介―」『MUSEUM』第596号、二〇〇五年

（注23）平壌地域の類例をあげる。第5図1は大城山城（『大城山の高句麗遺跡』第75図⑨）、第5図2は『高句麗時代之遺蹟　図版上冊』図246（「平壌」）、第5図3は『高句麗時代之遺蹟　図版上冊』87（「兵器所」）、第5図4は『同』56（「土城里」）など。

（注24）千田剛道「高句麗・高麗の瓦―平壌地域を中心として―」（注16前掲）

（注25）田中俊明「高句麗の平壌遷都」『朝鮮学報』第190輯、二〇〇四年

（注26）朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会『朝鮮遺跡遺物図鑑10』高麗編（1）一九八九年

図版出典

第1図　安鶴宮遺跡平面図『大城山の高句麗遺跡』（注10）

第2図　安鶴宮遺跡出土軒丸瓦　同右

第3図　安鶴宮遺跡出土軒平瓦　同右

第4図　満月台遺跡平面図『朝鮮遺跡遺物図鑑10高麗編（1）』（注26）

第5図　安鶴宮遺跡採集瓦

1・2『朝鮮遺跡遺物図鑑　3高句麗編（1）』（注21）

3・4「平壌遷都前後の高句麗瓦に関する覚書―東京国立博物収蔵資料紹介―」（注22）